

会員紹介：森田宏子さん

私の略歴



2012年 リオ+20 会議で

私は帰国子女として国際基督教大学(ICU)へ進学し、大学で異文化間コミュニケーションを専攻しつつ国際関係に関心を持つようになりました。これには恩師の緒方貞子先生との出会いが大きく関与していました。と同時に好きな語学を利用して国際会議関係や通訳のバイトをした経験も将来に繋がったと思います。1977年に卒業し、アメリカのデンバー大学院に留学しました。その際、初めての女性公使としてNY国連代表部に赴任なさった緒方先生に、勉学の方向性についてのアドバイスをいただき、国連事務局でのインターンシップを勧めていただきました。修士終了後にUNDPのJPOとしてカリブ海のハイチに赴任し、2年間勤務をした後ニューヨーク国連本部に転職し定年まで勤めました。

従事した仕事の内容

UNDPハイチ事務所 [1971-1981]

ハイチでの2年間は強烈な体験でした。当時は歴史上暗い、Duvalier独裁政権下でした。UNDP内ではリスク回避のため公私共々電話などでの言動に気をつけることが言い渡され、いざという場合の避難プランが伝えられていました。それ以外は特に緊迫感はありませんでしたが、生活や仕事場で停電が何日も続いたり、長期滞在者が必ずかかる数日間下痢の症状が続く Haitian Happiness になって5キロ痩せたり、車のタイヤが埋まるほどのモンスーンを経験したりも体験のうちです。私生活ではハイチ人を800人ほど雇ってミチコ産業という名の工場を切り盛りしていたやり手のミチコさん、貧民街の病院で医者、看護婦、栄養士などに従事していたカトリックの日本人修道女10名ほどや日本大使館にお勤めの代理大使夫妻などとの交流の思い出は忘れられません。

高校時代から学んできたフランス語でしたが、それで仕事をするのは別の次元の試練。助けられたのはUNDP現地事務所に優秀な英仏のバイリンガル秘書が何人もいたことです。私が必死に



ハイチの貧しい漁村の風景

作成したフランス語での文書、特に政府官庁宛の書簡などを大変フォーマルで美しいフランス語に直してくれました。政府との会合に出席した時はフランス語で聞きながら英語でノートを取りまとめていました。幸い事務所のプロフェッショナル同士のやりとり、打ち合わせは全て英語、本部との連絡も英語だったので何とかできました。

担当したのは産業や貿易のプロジェクトで UNIDO, UNCTAD, ITC、ILO などのかなりシニアの男性プロジェクト・マネージャーや専門家を相手に若い女性の私が予算や活動プランやの打ち合わせ、問題点の指摘をしなければなりませんでした。

そういう際、最初のベルギー人の Resident Representative から教わったことを心に留めました。それは UNDP 職員としてプロジェクトマネジメントのプロに徹すること、相手の専門家の年齢や専門性に脅かされることはないということでした。思い出深いプロジェクト視察はコーヒー



ハイチ首都のスラム街

農園生協のプロジェクト視察団に参加した時のこと。道のない道をジープで3時間ほどかけて到着した村にはホテルも民宿もなく、ただ1人の女性だった私は修道院に、他の視察団メンバーは神父の家に宿泊、コーヒー農園では責任者達とフランス語とクレオールに通訳を介してプロジェクトの状況を聞きました。

もう一つは息のできないほどの悪臭が漂うスラム街の開発のプロジェクト視察。こちらは幾つかの国連機関の共同プロジェクトで、コーヒー生協と同じく自助を促す仕組みで、自分達の住居やクリニックなどを作ることで日当をもらい、利益が

出る活動はコミュニティに還元するというものでした。

国連事務局に転職

開発のための科学技術センター Centre for Science and Technology for Development (CSD)

[1982 – 1992]

このセンターでは科学技術の専門的な業務というよりは先端技術の情報科学やバイオテクノロジー、ロボット学が社会のためにどのような役に立つかというような政策面での議論をサポートするのが仕事でした。政府間委員会に政策的アドバイスをする諮問委員会に関わるようになり、諮問委員会の書記を何年か務めました。開発を知らない専門家達が開発を語り、アドバイスをするのはおかしいという所長 (ASG レベル) の判断で毎年 NY にて行われていた会合をブラジル、インド、中国など途上国に移しました。昼食に現地の政府・民間・学界の代表をスピーカとして招いたり、簡単には外に出られないリゾート地で開催するので朝から晩まで会員同士顔を付き合わせて議論を続けるように仕向けたりしました。

事務局での開発アプローチ

その他、「いいアイデアにはお金がついてくる」という上司の持論の元でターゲット資金を集めることに成功。私の担当したネパールのプロジェクトなどは同じ内陸国のスイスから資金を集め、当時は国連事務局はプロジェクト実施機関ではないとされていたところ、実施するのは当事

国で我々はファシリテーターだと説明、実際、当時は珍しかった科学技術の優先問題を討議するためのマルチ・ステークホルダー懇談会を企画しました。その下準備の資料は現地の研究者などを雇って現地の社会的・文化的習慣からそれまでうまくいかなかったプロジェクトの原因を探るような報告書を書かせました。私達国連職員は全ての専門家にはなり得ないが、専門家を招集し、効率よく彼らの専門知識を目的のために動員することを教えられました。



ネパールにて

新しいイベントや会議の前は必ずコンセプトは何か、何をしようとしているかなどを納得いくまでチャレンジされました。色々な出張の機会が与えられましたが、印象が強かった一つは「砂漠化を防ぐための科学技術」というテーマの専門会議・視察旅行です。中国の蘭州で2日間の討議の後、戈壁砂漠を政府の役人に同行されて、専門家集団と国連代表の私と若いスタッフがバスで移動しながら干魃に強い品種を開発・実験している砂漠内の研究所を訪れ、内モンゴルから北京まで列車の旅をしました。又、ルワンダ・ブルンディ・ザイール（今のコンゴ）の中央アフリカ諸国の3者会議に、フランス語が出来るという条件でフランスの組織がスポンサーした出張を命じられました。そこではエネルギーや農作物（70種以上のバナナの研究所など）、水資源などテーマ別の研究の3カ国パートナーシップを組んでそれぞれの国のコンタクト研究所を決めて共同研究を始めるというのはパートナーシップの先駆けでした。どの国でも比較的平和だった80年代のことです。

経済社会局・持続可能な開発部 [1993 - 2009]

ここでの仕事は長かったのですが、携わった仕事は多岐にわたります。大きな枠組みは国連の首脳レベルの会議に何度か関わったことです。2002年のヨハネスブルグ、2012年のリオ+20、2014年のサモア会議、2015年にSDGsが採択された国連総会、その間の5年ごとに開かれる特別総会でのレビューのそれぞれが歴史を作っていたのですが、ハイレベル政治フォーラム（HLPF）の前任者の持続可能な開発委員会（CSTD）の全てで事務局チームの一員でした。大きな会議ではいくつかのテーマの担当になり、そのテーマの交渉をフォローし、決議案、行動指針、宣言文などを作り上げるサポートをするのです。担当したテーマは科学、教育、地域開発、小島諸国が中心でした。交渉サポートの他にもサイドイベントや展示会、講習会などを企画実践したり、国連機関同志での活動調整や情報交換をしたり、統計局と連携してデータ分析をして結果を文書にしたりなど、やることはいくらでもありました。担当したテーマのお蔭でUNESCOの教育関係の専門家会議やサイエンス会議に招かれ、地域開発・協力のテーマでアフリカ、アジア、南米でそれぞれ政府代表と地域機構を集めて既存の協力体制や問題点を討議する会議シリーズも地域開発銀行と協力して行いました。

5年間ぐらいは国別情報分析の責任者として各国からCSTDに提出される報告書のガイドライ

ンを作り、報告書をまとめて CSTD へのレポートを作成し、ヨハネスブルグ会議には 10 年分の国ごとのまとめ分析の出版物も作りました。これらの作業には多くのオンラインを含めたインターン雇って人員不足を補いました。他には Natural Resources Forum という商業用専門雑誌の編集長を任せ、学術的だけでなく CSTD のテーマに近い文献を取り上げ、ピアレビューをアレンジしました。次の部署に移る前は国連の外から新しく赴任した部長の参謀長もしばらく務め、部署内の機構改革の手伝いをしました。他にも国連本部契約委員会や人事昇進雇用委員会のメンバーになったり、邦人職員会会長を勤めたりもしましたが、どれもネットワークを広げる役に立ちました。

小島嶼開発途上国 (SIDS) 課 [2009-2015]

それまでの職務経験を総括的に発揮でき、最もやり甲斐を感じたのが SIDS の仕事でした。冒頭で記した幾つかの首脳レベル会議の中でもサモア会議準備では 2 年前から中心的に指揮をとっていました。首脳会議そのものだけではなく、地域準備会議 (SIDS 地域のカリブ海、南太平洋、及び大西洋・インド洋) の交渉サポートを行いました。関連するテーマでの出版物や国連機関間の inter-agency coordination, 専門家会議企画、プロジェクトの立案などにも色々携わりました。



サモア会議企画視察団に参加

代表的なプロジェクトの一つは University Consortium on SIDS があります。これは南太平洋大学や西インド諸島大学といった地域大学やモーリーシャス、セイシェル、そしてドナー国スペインのカナリア諸島にあるラス・パルマス国立大学など 7 大学が協力してオンラインの持続可能な開発専攻の共同修士プログラムです。学生は履修コースの一部を自分の所属大学で対面式に授業を受けられ、残りは他の大学が得意とする分野でオンラインの授業を受けられるというものでした。IT やプログラム内容などそれぞれの委員会を作り、何度も相談して共同プログラムを 3 年越しで作りました。もう一つのプロジェクトは国連の開発基金に提出された 10 の中から選ばれた私のチームの企画書を基にしたものです。

カリブ海の 3 カ国と大西洋・インド洋の 6 カ国の SIDS を対象にしたプロジェクトは SIDS の気候変動、ヘルスなどのそれぞれの優先課題をマルチ・ステークホルダー会合で話し合い、脆弱性と反発・回復力を簡単な指標を決めていくというものです。何故 SDGs の採択された 2015 年の前年に開催されたサモア会議とそこで採択された Samoa Pathway と呼ばれる行動指針に意義があるかという、SIDS にとっての最重要課題の幾つかを一足先に徹底的に分析、論議、交渉

してSDGsに反映させる土台を作ったからです。SIDSのお蔭で気候変動や海洋がそれぞれ独立したSDGsにすることを認めさせたと言っても過言ではありません。

サモア会議の年に合わせて「SIDS 国際年」を国連で採択させたことも SIDS についての世界の認識を高めるために重大な役割を果たしました。その国際年を開幕から閉幕まで1年間何をするかの企画の全てを私のチームで inter-agency 企画委員会を作って SIDS の政府代表を3地域から招いて相談して決めていきました。豊かな SIDS の文化・音楽などを紹介する写真、文芸品展示会、音楽 CD、ポスターコンテストから気候変動や社会的課題の専門家を集めてのパネルなど



SIDS 大学コンソーシアムの調印式 サモア会議の SIDS 展示場でコアチームと企画、実施をするのは大変楽しかったです。 展示会ではユネスコで担当していた SIDS の世界遺産の日本人の担当者が日本人と協力してハイレゾリューションの写真データを送ってもらい、それを NY の専門店引き伸ばしてパネルにして会議荷物として送り、現地で展示用パネルを作ってもらい設置しました。

国連退職後



定年退職後まず取り掛かったことは国連で働きながら子育てをした体験を書いた本を出版したことでした。日本の女性にも仕事か家庭かを選ばずにワークライフバランスを目指せるよう仕事環境が変わってほしいという願いも込めていました。同時に外国でバイリンガルの子育てをするという大変さもテーマにしていたので NY の日本クラブで講演する機会に恵まれたり、NY の邦人新聞でも記事にいただいたり、ダイバーシティ推進室がある山口大学で地元のお母さん方達に講演する機会もいただきました。

その後はご縁があつて母校の ICU で外交・国際公務員養成 (DIPS) プログラムの立ち上げに関わり、DIPS アドバイザー兼非常勤を務めています。上智大が 2021 年から始めた国際化協力プログラムでもコースを担当することになっています。「国連と持続可能な開発」のテーマで SDGs とアフリカや SIDS などの脆弱国に焦点を当てつつ国際キャリアで役に立つ実践的課題を与えます。キャリアイベントや国連研修を企画・実践するのも仕事です。昨年から外務省の委託 JPO 研修にも関わっています。若い人達に接していると国際公務員になる素質を持っている人たち

が結構多いことに励まされるので、少しでも将来の国際公務員が増えるお手伝いをできたらと思います。

仕事上の苦勞と喜び

仕事上の苦勞はいくらでもありました。様々な形から開発に関わってきた経験からは英語力や専門性、管理能力、チームワークなどなど国連能力に含まれるスキルも大事ですが、臨機応変性や咄嗟の時の判断力が結構必要になった場合が多くありました。どうしても途上国の環境だと予期しなかった事態に直面し、計画通りに行かないことが起きました。相談相手もいない場合どうするか。その都度機転を効かせなければなりませんでした。これは子育てでも学びました。

開発のための科学技術センター勤務の時、諮問委員の1人のデンマーク人のお供でブルンデイに2週間滞在し、政府高官や地元の民間、非営利団体の人達をインタビューし、色々な開発プロジェクトを視察する機会がありました。それは諮問委員会で予定されていた「最貧国のための科学技術への提言」というテーマを話し合うための下準備の一環でした。2週間見聞きしたことに基づいて報告書を作成しなければなりませんでした。ブルンデイからの帰途はベルギーのブリュッセル経由でした。そこでデンマークの専門家と別れて私はNYへの便に乗り継ぐ予定でしたが、飛行場で置き引きにあったのでした。一瞬の間でしたが手持ちカバンを盗まれ、中に入っていたメガネやカメラなども惜しかったです。一番パニックだったことは2週間分のノートがなくなったことでした。もしや他人に価値のない中身が捨てられていないか空港中探し回り、ゴミ箱なども除いたのでしたが無駄でした。すぐにデンマーク人に連絡を取り、事情を話して謝りましたが、自分のできることをして、NY行きの飛行機の中で寝たり映画を見たりせず、ひたすら思い出せることを書き出しました。それを何とかまとめてデンマーク人に送り、補足してもらって報告書は無事書き上げました。失敗や間違いにめげても始まりません。

他に予想外の展開になった例は上記のサモア会議に因んで企画したSIDS国際年の展示会のために頼りにしていた展示会の資金源が本番のイベント直前でスポンサーから事情があって断われた時です。既に必要な材料や現地での手配はUNDPが立て替えて全て調達済み、今更展示を中止する訳には行かなかったので、すぐに代替りのスポンサーを探す必要がありました。安保理の次回選挙の候補者の国の一つトルコ国連代表部に頼みました。安保理選挙に出る国の中には38カ国あるSIDSsが票集めに影響力を持つのでSIDSのための目立つ活動は考慮してくれる可能性が高いのです。資金援助をしてもらう代わりにトルコ大使を展示会の開会式の冒頭で挨拶してもらうことで話がまとまりました。

喜びの一つは1年以上地域準備会合、地域を跨いだSIDSの会合、そしてグローバルのレベルでEU、アメリカ、カナダ、日本その他との交渉がまとまった瞬間です。それまでの苦勞が吹っ飛び、交渉者も事務局スタッフも喜びを共有できます。SDGsの時もそうでしたが、交渉は日中夜かけて、時には徹夜までして延々と続きます。開発プロジェクトなどの枠組みはグローバルの場で決定された行動指針や宣言文がやはり基礎なのです。ノートを取り、交渉文をスクリーンに映し出

して修正を重ねていくプロセスは交代性でスタッフが行いますが、責任者は常にひな壇で議長のサポートをしていなければならないので持久性が求められます。そこで役に立つのはチョコレートです。これは学生時代、3時間ぶっ続けで同時通訳の訓練を受けた時にスピードエネルギー源になると先生から言われて用意した時からの習慣です。他にも「腹が減っては戦が出来ず」といつも交渉やいつまでもに食事ができるわからない出張には音が出ずにパッと口にできるおやつ（マンゴなどの乾燥果物とかパワーバー）と水筒を必ず持ち歩いていました。

私の生き方

私には人生哲学のようなものは特にありません。でも人との出会い、又仕事や課題とのご縁は人生を通して大事だと思ってきました。SIDSを担当することになった時、島国の日本出身ながら途上国のSIDSとしては考慮されないのとそれまでの前任者がカリブ出身者だったこともあって、何人かのSIDSの大使に「マダム、あなたはSIDSの何をご存知か」と不服そうに聞かれました。私は「国連の最初の赴任地がハイチでした。私は自分のためのアジェンダはなく、あなた方SIDSのお役に立ちたいだけです」と答えました。そして徐々に信頼関係を築くことができました。

学生に国連に入るのにはどうしたらいいですか、若い時にどんなことをやりましたかなどとよく聞かれますが、私はバイトしながら稼いだお金で旅行し、好きなことをやっていたので偉そうなアドバイスなどできませんが、無駄になる経験はほぼないと思います。

私の著書に書いてありますが、子育ては持続可能性に通じるということを実感しました。何年前、末の娘が大学で専攻したので卒業プロジェクトの撮影のお供で瀬戸内美術祭のためアートの島を回りましたが、一つの展示のタイトルに「不在の存在」というのがありました。まさに働き続けた母親は年中いるわけではないけど必要な時にはいてくれるという存在になれたかもしれませぬ。「親父の背中」ならず「母の背中」を見て育った子供達はそれぞれの仕事を見つけワーク・ライフを楽しんでいるようです。

定年後の素晴らしいことはやりたいことだけやり、関わりたい人たちだけと関われることです。あくせくすることなくこれからも元気なうちは日本とアメリカとを往復しながら心豊かに暮らしたいと思っています。